

明治時代

慶応 3 (1867) 年、江戸幕府は政権を朝廷に返し明治政府が発足した。郡上藩が郡上県となり、町村の編成や政治の仕組みが変わった。明治 30 (1897) 年になると、鮎立村、大鷲村、鷲見村、西洞村の四村が合併して一つの村となった。この時、村名をどうするかで問題となり、富田新田の富田にするなどと色々な意見があったが、鷲見郷の「鷲」を一字取り、郡上郡の中で一番土地が高いところにあるので「高」の字を付けて「高鷲村」と名付け、村長に下田十郎兵衛になった。

高鷲村は山が多く、田畑が狭いところへ、明治になると人口が増え、家族も増え、毎日食べていくことがやっとの家が多くあった。このような状況を見るに忍びず、当時の役場職員だった古屋太郎右衛門が北海道への開拓移住について村内を駆け巡って希望者をつのった。特に鷲見村からの応募者が多かった。明治 34 (1901) 年 4 月に 24 戸 60 名の人達が北海道の下川町へ入植したが、太郎右衛門は都合が悪くなったので、弟の達造が団長を務め、土地の割り当てなどの采配を行った。達造が入植したところは、原始林が生えている原野で、掘っ立て小屋を作り大変苦勞した。なお、大正 7 年までに 224 戸が移住しました。現在入植地の下川町と高鷲はお互いに見学交流している。

大正時代

大正 9 (1920) 年には旧役場が新築された。立地場所は、現在の高鷲小学校校庭のバックネットがある所で、向鷲見白山神社のあった所である。その創設は承久の乱以前の及ぶとも言われている。明治 41 年 (1910) 大鷲の四社が合祀して大鷲白山神社として、現在は正ヶ洞天王に祀られている。昔この地が田圃であった頃、夕方日没になったので打ち苗（苗束を田圃の所々に配置しておくこと）をしたまま、田植えは翌日の仕事として家路についた。翌朝来てみると、その打ち苗が皆杉になり根付いていたのでそのまま神様の森として伝えられ、地名も『さなえだの宮』と言われていた。なお、役場は昭和 47 年 (1972) に現在の場所に新築移転した。



昭和時代

昭和のはじめ頃は、林業の生産は極めて少なく、特に主食については反当たり 2.8 俵と少なく、毎年相当量移入し続けていた。この窮乏から脱するため昭和 9 (1934) 年に農村経済更生計画に沿うことになった。続いて昭和 13 (1938) 年特別更生助成村の指定を受けて、経済自立に向かった。昭和 13 年、14 年頃より軍事目標に合わせて、加藤完治が唱えた適正規模農家の創設を行うには、大陸進出以外に他の方法がないとの気運が高まり、政府の経済更生政策の一環に載った。このような時に、県開拓課の田中・岡崎両氏が村に来て、満州の実情について詳しく説明した。当時の農会長野村孝太郎は、満州に渡って視察を行い、帰村後直ちに分村計画をたてた。その計画は村の総戸数 700 戸のうち 200 戸を満州の琿春に送出し、村の人口を組織的



に2分して送り出し一方を残し、母村の1戸当たりの耕地を増やす「分村移民」が強力に進めた。これは農村の相対的過剰人口に対する棄民政策だともいえる。さらにこれを実現するため、昭和15(1940)年2月野村農会長は70歳の老体であったが、内原(現水戸市)の内地開拓訓練所に入所・訓練を受けた。内原で訓練を終えて帰村した野村農会長を団長とする先遣隊23名は、4月5日出発に当たり大鷲白山神社に参拝し前途の成功を祈願しました。4月10日には、現地琿春県純義村図魯屯に到着し、「大陸高鷲村開拓団」の標柱を建て、満州開拓の第一歩を踏み出しました。

琿春では、1戸に水田用として3ha、畑用としても3haの土地を貰い、開拓を始めた。開拓団は、部落ごとに分けて部落長を置き、本部には団長をはじめ、農事指導員、経理指導員、畜産指導員を置いて相談を受けたり、指導も行った。また、学校も作り、診療所も作った。作物は米、大豆、燕麦、稗、野菜、馬鈴薯、レントコーン、麻で、畜産にも力を入れ、北海道の農業のやり方をまねた。

昭和21年9月1日に日本への帰国命令が出て、難民収容所から間島・吉林・新京を経由してコロ島に泊まり、10月21日に船で九州の博多港へ上陸し、10月23日に岐阜へ帰ってきた。

開拓団の人は、ほとんどの人が自分の家や土地を処分して再び高鷲に帰ってこようとは思わなかったの、帰っても自分の住む家はなかった。帰国者は一時浄勝寺に収容され、食糧や衣類の支給を受け身の振り方を考え、そして土岐市の蘭仙開拓地へ入植する者、蛭ヶ野開拓地へ入植する者、身寄りに世話を頼む者、北海道下川町へ帰る者、などそれぞれ身の振り方を考えて別れていった。

昭和20年8月15日、日本の敗戦によって太平洋戦争は終わった。戦災者や引揚者たちの生活をどうするかが問題となり、各地で土地の開拓がおこなわれた。高鷲村では蛭ヶ野地区580町歩、鷲見上野地区440町歩、切立地区230町歩の開発計画が岐阜県より示され食糧問題と失業問題を解決しようとした。

このような広大な開拓高原は、国や県からも注目される存在となり、昭和33(1958)年に表面化した自衛隊の演習場問題は、開拓が軌道に乗りつつある時期に村民にとっては大きな問題となった。昭和34年1月、陸上自衛隊第十混成団から高鷲村に、東海地方と北陸地方のほぼ中央にある高鷲村の開拓高原地帯に演習場を設置したいと申し入れがあった。約2900haの大面积で、設置後は部隊の常駐や小飛行場の開設も予定しているとして、用地買収に強い熱意を示した。しかし、開拓の村高鷲村では最初、土地所有者らが強く反対したため断りましたが、自衛隊側は県などの協力を得て、立ち入り調査を進め、昭和35年には買収地域を切立ち地区1400haに絞って実施調査を求めてきた。対象となった切立明野開拓団は県からの補助が打ち切られ、開拓営農計画に支障をきたすなど混乱した。村内でも賛成反対両派が対立する事態となり、さらに県からの強い要請を受けて大半の地区は賛成に傾き、村議会に一任した。村では自衛隊・県と協議を重ねた結果、面積を約500haに縮小することとし、同時に村民による対策委員会を設け、「自衛隊演習場設置を仮定した場合における補償要求と要望事項」を提出した。内容は譲渡価格と代償地、立退者の補償、道路整備、河川砂防工事など多岐にわたった。このように一時は受け入れに傾いたが、村民の不安は消えず、村当局も、住民の安定した生活はどんな補償条件にも変えられないと判断し、昭和42(1967)年、高鷲村として正式な断り書を提出し、自衛隊演習場問題に終止符を打った。

その高原の大根栽培は、「漬け物用」として作られ神戸市場へ出荷されたのが最初だった。その後、伊勢湾台風によって大根加工場が壊されたために「漬け物用」から「生食大根」に切り替え、岐阜・名古屋市場に販路を拡大した。その後、大根栽培農家は増加し、高鷲村高冷地野菜生産組合を結成し、生産・出荷・対イオウ病など色々研究し努力をして、販路を大阪市場まで拡大した。昭和40年頃から高鷲村には様々な観光施設が作られ、スキー場・ゴルフ場・テニスコート・ラグビー場・レジャー施設等です。そのうちの多くが冬のスキー客です。高鷲村では農業に立脚した観光立村を目指し、その結果スキー場及び民宿と大根農家の労働時期が違うため、お互い補完関係となり、高鷲村は大きく発展していった。

戦後の高鷲村では、牛乳の白、大根の白、スキー場の雪の白を合わせて三白産業が村の発展の原動力になった。



上野高原の大根畑